

# 英語学習者の語彙学習行動改善に資する方略指導プログラムの開発

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: eng<br>出版者:<br>公開日: 2022-03-29<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 山本, 大貴<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10291/22277">http://hdl.handle.net/10291/22277</a>                  |

# 2021年度 国際日本学研究科

## 博士学位請求論文 (要旨)

### 英語学習者の語彙学習行動改善に資する 方略指導プログラムの開発

国際日本学専攻

山本 大貴

#### 1 問題意識と目的

動機づけは、第二言語習得の成功に欠かせない個人差要因の1つだとされている (Masgoret & Gardner, 2003)。したがって、学習者の動機づけを高めることは、教員の重要な役割だといえる。

本研究は、学習者の語彙学習に対する動機づけ (Vocabulary Learning Motivation: VLM) を高めるなどして、語彙学習行動の改善を目指す教育方法の開発を試みた。語彙学習において動機づけは、以下のような理由で非常に重要だと思われる。

1 つ目の理由は、語彙力の向上は第二言語を習得するうえで不可欠なものだからである。語彙力は、聞く力、読む力、書く力、話す力、社会言語能力など、第二言語能力のあらゆる側面と関連している (Schmitt, 2010)。よって、学習者の目標が何であれ、語彙学習は欠かせない。

2 つ目の理由は、語彙学習には多大な努力が必要だからである。様々なジャンルの英語の文章を理解できるようになるためには、8000 word family から 9000 word family もの語彙力が必要だとされている (Nation, 2006)。これほど大量の単語を学習するには、強い動機づけが必要となる。

3 つ目の理由は、語彙学習は授業外で行う場合が多いからである。多くの場合、授業ではコミュニケーション活動や難易度の高い英文の読解など、教員やクラスメート、教室の機材無しには行いにくい活動が優先して実施される。語彙学習は1人でもできる活動であるため、授業中に語彙学習の時間を十分確保する教員は少ないと思われる。教員やクラスメートの目が不在1人での学習に熱心に取り組むためには、動機づけが不可欠である。

4 つ目の理由は、語彙学習は多くの学習者にとって楽しいとはいえないものだからである。Zimmerman and Schunk (2007) は、単語の暗記を、つまらない学習の代表例として挙げている。

学習者に、重要で、個人で多大な努力をする必要があるが、面白いとはいえない学習に取り組んでもらうためには、教員による動機づけが必要であろう。しかし、VLM を高めるための動機づけ方略の開発を行った研究はこれまでほとんどないといえる。したがって、本研究では、VLM を高め、学習者が楽しく効率よく語彙学習を行えるよう支援する実践の開発を目指すこととした。

#### 2 構成及び各章の要約

##### 第1章: はじめに

第1章では、研究の目的と重要性を論じる。概要は、上述 (「1 問題意識と目的」) した通りである。また、各章の内容の概略を紹介する。

##### 第2章: 研究背景

第2章では、本研究と関係の深い先行研究のレビューを行う。まず、第二言語学習者の動機づけに関する

先行研究をまとめる。具体的には、第二言語学習者の動機づけ研究の歴史 (e.g., Gardner & Lambert, 1959)、動機づけ研究の意義 (e.g., Zimmerman & Schunk, 2007)、自己決定理論 (e.g., Ryan & Deci, 2017)、第二言語における動機づけ自己システム (Dörnyei, 2005)、動機づけ方略 (e.g., 廣森 & 田中, 2006)、VLM (Tseng & Schmitt, 2008) などに関する研究をレビューする。さらに、学習方略に関する研究を概観し、学習方略の定義 (e.g., Oxford, 2017)、学習方略の分類 (e.g., O'Malley & Chamot, 1990)、学習方略と自己調整の関係性 (e.g., 尾関, 2010)、学習方略指導 (e.g., Plonsky, 2019)、語彙学習方略 (e.g., Moir & Nation, 2002) 等について論じる。

先行研究のレビューを通して、よい語彙学習者になるためには、自分の動機づけをコントロールすることが重要であると強調する。また、VLM に関する研究が十分に行われてきたとはいえないこと、特に VLM の向上を目指す指導方略の開発はほとんどないことを指摘する。最後に、本研究における以下の 3 つの研究・クエスチョンを示す。

- (1) 学習者の VLM を高める動機づけ方略の開発に意義はあるか。
- (2) 学習者の語彙学習行動 (motivated learning behavior for vocabulary learning: MLB-V) に影響を与える要因は何か。
- (3) 学習者の語彙学習行動改善のために効果的な指導方法はどのようなものか。

### 第 3 章: Study 1

第 3 章は、Study 1 について論じた章である。

Study 1 の目的の 1 つは、学習者の VLM を高める動機づけ方略の開発に意義はあるかを検討することである。そのためには、1) VLM と英語学習全般に対する動機づけの間に強い相関関係がないこと (もしあった場合には、英語学習一般に対する動機づけを高めれば VLM も同時に高まることになり、VLM に特化した動機づけ方略の開発の意義がなくなる)、2) 学習者の VLM がさほど高くないこと (伸びしろがあること)、3) VLM が英語学習全般に対する動機づけよりも MLB-V を強く予測すること、の 3 点を確認する必要がある。Study 1 では、自己決定理論 (Ryan & Deci, 2017) に基づき、動機づけを内発的動機づけ (intrinsic motivation: IM) と、自己決定性の高い外発的動機づけ (self-determined types of extrinsic motivation: SDEM) に注目した。

大学で英語を学ぶ学習者 88 人を対象にアンケート調査を実施し、結果を統計的に分析した。その結果、1) VLM と英語学習全般に対する動機づけの相関はそれほど強くないこと、2) 学習者の語彙学習に対する IM (IM-V) は低い傾向にあったが、語彙学習に対する SDEM (SDEM-V) は非常に高いこと、3) IM-V は英語学習全般に対する IM よりも MLB-V を強く予測するが、SDEM-V は MLB-V をほとんど予測しないことなどが明らかになった。これらの結果は、IM-V を高めることは効果的だが、SDEM-V を高める指導の効果は小さいことを示唆している。

### 第 4 章: Study 2

第 4 章は、Study 2 について論じた。

Study 1 では、SDEM-V を高めても、MLB-V の改善にはつながらない可能性が高いことが示された。そこで Study 2 では、「将来のなりたい自分」に関連するという点で SDEM と関連する概念である「理想の自己像のヴィジョン」を明確化することの意義について検討する。Dörnyei and Kubanyiova (2014) は、学習者の自身の理想の自己像のヴィジョンを明確化することは、効果的な動機づけ方略であるとしている。Study 2 では、豊かな語彙知識を獲得し、その知識を活かして活躍している自己像のヴィジョン (Vision-V) に注目し、Vision-V の明確化は SDEM-V を高めるよりも MLB-V の改善に効果的であるという仮説を立て、97 名の英語学習者を対象とするアンケート調査で得られたデータを分析して検証した。

その結果、仮説通り Vision-V は SDEM-V よりも MLB-V を強く予測することが示唆された。さらに、多くの学習者は強い SDEM-V を有していたが、Vision-V はさほど高くなく、伸びしろがあることが示された。

これらの結果は、Vision-V の明確化は、MLB-V の向上に寄与する可能性があることを示唆している。

### 第 5 章: Study 3

第 5 章は、Study 3 について論じる章である。

Study 3 では、学習方略指導により VLM を向上させることを目指した授業をデザインし、実践した。Tseng and Schmitt (2008) は、自分の動機づけをコントロールすることが、よい語彙学習者になるために欠かせないことを示した。そこで、自分の VLM を高める学習方略を学ぶことが、語彙学習を楽しく効率よく行うために効果的だと考え、学習方略指導という形での実践を計画した。自己動機づけ方略を含む情意方略を指導する実践はこれまでにあまり行われておらず (Bielak & Mystkowska-Wiertelak, 2018)、独自性を有する取り組みだと思われる。また、教員が効果的だと考える方略を一時的に教えるのではなく、学習者が自分に合う方略をクラスメートとの議論を通して考えていくことを重視する内容とした点も本実践の特徴である。ただし、事前に何も指導することなく学習者同士で議論させても優れた方略は見つからない可能性が高いため、事前に語彙学習を考えるうえで役立つと思われる情報 (自分でテストをして語彙を思い出す経験を繰り返すことの効果、自分の学習スタイルに合った方略を選ぶことの重要性、内発的動機づけを高める方法) を提供した。

参加者は、大学生 52 名である。実践の効果は、実践の前後に実施した語彙テストのスコア、アンケート調査の結果、学生間の議論の録音を分析することにより検証した。その結果、多くの参加者が、その実践を楽しく意義深いものだと感じ、さらに自らの VLM を高められる方略を学ぶことができていたことがわかった。クラスメートとの議論によってより優れた学習方略が誕生したケースがみられるなど、議論を行うことの効果も示された。また、授業受講後に受験した語彙テストの平均点が、授業受講前に受験した語彙テストの平均点よりも有意に高くなった。さらに、語彙学習に対する自信を深めた参加者もいた。一方で、授業実践の約 1 か月後に実施したアンケートの結果からは、授業で学んだ学習方略を使用し続けている参加者はさほど多くないことも明らかになった。

### 第 6 章: Study 4

第 6 章では、Study 4 について論じた。

Study 4 は、Study 3 で行った方略指導プログラムを改良した実践を、大学生 41 名に実施し、効果を検証したものである。具体的には、Quizlet や Kahoot! といったアプリを利用したこと、Vision-V を明確化する活動を行ったこと、Study 3 で参加者が考えた語彙学習方略を紹介したこと、などが Study 3 の実践との違いである。

実践の効果は、実践後の語彙テストの結果、参加者が使用した語彙学習方略、参加者の実践に対する感想等を分析することにより検証した。さらに、学習者同士の議論において、どのようなときに動機づけが高まったり低下したりするのかについても調査し、活発な議論を行えるよう支援する方法についても検討した。

データを分析した結果、多くの参加者が、本実践における語彙学習は、普段の語彙学習よりも楽しく熱心に行っていたことがわかった。語彙テストの平均点も非常に高くなった。クラスメートとの語彙学習に関する議論は楽しく有意義だったと感じた参加者や、Vision-V を明確化する活動は効果的だと感じた学習者も多くいた。しかし、本実践に参加する前から自身の語彙学習方法に自信を持っていた学習者の一部は、本実践をさほど効果的だと感じなかったことがわかった。ディスカッションにおける動機づけについては、よいアイデアが思いついたときなどに高まることが示唆された。一方で、議論が停滞したときには、動機づけが下がることがわかった。

### 第 7 章: まとめ

第 7 章では、Study 1~4 の結果を要約し、リサーチ・クエスチョンの答えをまとめたうえで、本研究の意義と限界について論じた。